

## 古代ローマ庭園の性格とサルスティウスの彫刻蒐集の解読

小泉篤士（慶應義塾大学）

古代ローマの美術に対するわれわれの関心の不均衡、すなわち公的な側面への偏重を是正すべく、私的領域のひとつである庭園（horti）に関するシンポジウム（1995年）や展覧会（2007年）が近年開催されている。紀元前1世紀の歴史家サルスティウス（Gaius Sallustius Crispus, 86-34 BC）が開設した庭園（Horti Sallustiani）もその研究対象に含まれているが、本庭園はのちに皇帝領に組み込まれたため、依然として歴代皇帝との関連に目を奪われがちであった。しかし、それでは皇帝という権力と美術との結びつきに対する関心の延長線上にあるに過ぎないのではないだろうか。本発表では、サルスティウスが史書のなかでローマ人の放蕩を嫌悪して贅沢を諷めておきながら、それを書くために隠居した庭園は敷地の規模と彫刻蒐集の点で当代随一のものであったという矛盾を出発点として、これまで明確にされることのなかったサルスティウス庭園の当初の性格と彫刻蒐集の意図を解明する。

まず、ローマの他の著述家の言動に基づき、共和政末期における庭園の性格とその蒐集意図をより一般的に規定することで、サルスティウス自身の沈黙を補う。共和政ローマの領土拡張に伴うヘレニズム諸国の物品の移入はローマの知識人を美術蒐集に駆り立てた。戦利品を持ち帰った将軍たちの行動で特徴的なのは、郊外の別荘（villa）における個人図書館と個人美術館の設立である。キケロの著述に見られるように、蔵書形成への欲求と美術品蒐集への熱意は分かちがたく並行していたことを強調しておきたい。その動機となったのはギリシア的教養への憧憬であろう。それは、大カトーが美德と考えていたようなローマ伝統の質実剛健さからは外れ、ウァロによって批判されたが、共和政末期の政治状況と相まって、ヘレニズムの王政とその暮らしぶりがしだいに理想のモデルと見なされるようになったことは否定できない。また、ローマの伝統的な価値観と相容れない理想を実現するにあたって、都市の周縁という庭園の地勢学的重要性は看過できない。他の庭園の所有者の経歴や立地と比較しても、サルスティウス庭園が例外であったとは言えない。すなわち、人をも物をも遠ざけて完全に俗世から隠遁していたとは考えにくいのである。

ついで、所有者の歴史的変遷のなかでの蒐集作品の共時態を推定する。しかし、出土した作品群の移入時期を推定する手懸かりとなる記録が、杜撰であったり改竄されていたりしたことが個別研究から明らかにされている。これに代えて作品の主題推定を利用することで、皇帝所領期にふさわしいものとサルスティウスの蒐集に帰属させる解釈が可能なものとを峻別し、移入時期を推測する。その結果、《ニオベの子たち》や《アルテミスとイフィゲネイア》は「ギリシア文化のローマ世界への融合」として解釈可能であり、ギリシア崇敬という口実によって蒐集が正当化され得たであろうことを指摘する。